

**SLEASTランから50年
ゆかり安平町で記念フォーラム開催**



▲左から和田氏、浜田氏、石川氏

ステーション」に向かうべく、追分駅で下車すると、待合室にさまざまな鉄道関連の資料が展示されており、かつて機関区があった「鉄道のまち」の歴史を今に伝えている。追分駅は、12月14日に室蘭—岩見沢間を走った

石炭列車が果たした役割

線の沼ノ端—岩見沢間は、輸送密度が200人以上2000人未満の「黄線区」のひとつに指定されており、将来的な存続が危ぶまれている。駅の閑散ぶりとは対照的に、鉄道をコンセプトにした道の駅はファンの支持が高く、毎年、上位人気をキープしており、この

部では東武博物館常務理事の浜田晋一氏と釧路市立博物館の石川孝織氏が登壇し、浜田氏はSL動態保存の取り組みを紹介した。

ある。また、C11が牽引する14系客車のうち2両はJR北海道から譲受した車両で、オハ14・505のほうは、「はまなす」のドリームカーとして愛されていた貴重な車両だ。

後世に残すべき鉄道文化の価値をしつかりと理解し、有効活用し

3月には神奈川県川崎市の扇町駅と埼玉県の熊谷貨物ターミナルを結ぶ石炭列車が運行休止に。「これによつて、日本国内から鉄道による石炭輸送が完全に終了した」と説明すると参加者は感慨深げに耳を傾けていた。



▲道の駅で展示されているD51 320号機

1975（昭和50）年12月14日は、日本の鉄道史におけるエポックメイキングな一日といえる。明治期から日本の発展を牽引し続けてきたSLが、完全に姿を消したのだ。その舞台は北海道の室蘭本線であり、全国から集まつたファンのフィーバーぶりは、いまも語り草になっている。

SLラストランからちょうど50年目に当たる2025年12月14日、安平町の道の駅「あびらD51ステーション」で記念フォーラム（主催・空知総合振興局）が開催された。SL最後の力走を追った力メラマンが当時の思い出を語ったほか、さいたま市の鉄道博物館からの「中継」では、最終列車に乗務した機関助士が50年ぶりにC57-135機と感動の対面を果たす場面も。有識者による提言もあり、北海道の鉄路が縮小するなか、改めて鉄道の価値を考える機会にもなった。

（フリーライター・内海達志）

の鉄道史におけるエポックメイクを牽引し続けてきたSしが、完結蘭本線であり、全国から集まつてしまっている。

おけるエ。ボックメー^キ
続けてきたS^ルが、完
めり、全国から集まつ
る。
5年12月14日、安平町
（主催・空知総合振
興）が当時の思い出を
ては、最終列車に乗務
路を果たす場面も。有
改めて鉄道の価値を
イター・内海
達志）

11月14日は、日本の鉄道史におけるエポックメイク
明治期から日本の発展を牽引し続けてきたSLが、完
成の舞台は北海道の室蘭本線であり、全国から集まつ
たりは、いまも語り草になっている。

1975(昭和50)年
ングな一日といえる。明
全に姿を消したのだ。そ
たファンのフィーバード
SLラストランから七
の道の駅「あびらD51フ
興局)が開催された。S
語つたほか、さいたま市
した機関助士が50年ぶり
識者による提言もあり、
考る機会にもなった。

1975(昭
ングな一日とい
全に姿を消した
たファンのフイ
SLラストラ
の道の駅「あび
興局)が開催さ
語ったほか、さ
した機関助士だ
識者による提
考える機会にな

昭和50)年
いえる。明
たのだ。そ
イーバーバ
ノンからち
ひらD51フ
された。こ
さいたまき
が50年ぶり
旨もあり、
もなつた。

12月14日
明治期から
この舞台は
ふりは、い
うようど50
ヘテーショ
ンし最後の
市の鉄道博
りにC57

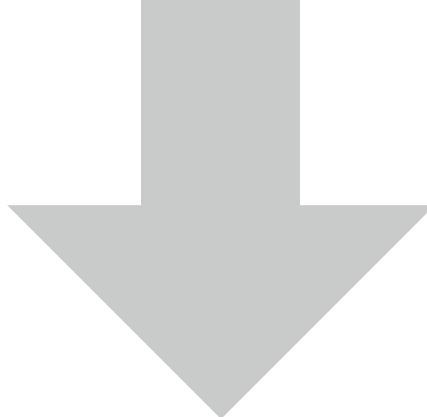
は、日本の發
北海道の
まも語り
3年目に少
「」で「
力走を込
博物館かこ
135機

本の鉄道史、
発展を牽引
の室蘭本線
り草になつ
当たる20
記念フォー

における工
し続けてき
であり、へ
くいる。

上ポツクメ
さたSLが
全国から集

ベーキ
か、完
未まつ



**続きは『月刊クオリティ』本誌を
ご覧ください。**

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)